



## 現代日本資料センター —「灰色文献」

坂口和子

**最**最近のめざましい電子技術の進展で出版の形態も多様化し、情報の発生量は増加する一方である。中には公表されているはずなのに、あるのかないのか分からない出版物も多い。通常、書籍販売の流通によらず配布が限定されていて簡単には入手できない「非定形的」埋蔵情報あるいは印刷物を「灰色文献」と呼ぶ。白日の下に出版された完全公開の「白」文書でも秘密の「黒」文献でもなく、その中間のグレーゾーンに在る文献という意味をも有する。探索のツールに乏しく存在の確認が難しいところから、アクセスや管理の点で多くの問題を抱えており、実はライブラリアンの間では厄介なものと密かに恐れられてきたものでもある。「灰色文献」の例としては、政府中央省庁及び地方自治体の行政資料、シンクタンクや非営利団体などで作成される調査研究報告書、技術レポート、会議資料などがある。日本研究の分野が成熟するにつれ、最近この種の文献は学術的にも貴重な情報源となる一次資料としての価値が認識されるようになり、積極的に収集に取り組み動きが出始めてきた。そこで今回は代表的な「灰色文献」のデータベースを紹介したい。

電子政府 e-Gov  
(総務省行政管理局)  
<http://www.e-gov.go.jp/>

かつて、政府資料といえば灰色文献の代名詞と言われるほど入手するのが困難であったが、政府情報へのアクセス環境は今激変しつつある。行政改革の一環として昨年4月に施行された「情報公開法」により、国民の情報開示要求に対応する政府の新しい情報システムe-Govが動き始め、日本でも本格的な電子政府の時代が到来した。電子媒体を含む広範な行政文書が情報公開の対象になっており、イ

ンターネット等を通じて一般に公開される情報量も検索システムの質も飛躍的に向上した。

行政情報のポータルサイトを目指す総務省の「電子政府の総合窓口」は、各省庁のホームページの掲載情報を検索するシステムと、各府省が整備する行政情報のクリアリングシステムを横断的に検索するシステムからなり、英語で検索することもできる。ワンストップサービスのe-Gov窓口から、請求頻度の高い行政文書、例えば、審議会、委員会の報告書、議事録、プレスリリース、政策に関する文書など、すべてここから効率よく入手できるよう実にはさまざまな工夫がなされている。白書など市販の政府刊行物も敢えて買わなくても居ながらにしてデスクトップで読むことができるし、最新官庁統計月報や世論調査結果等もお手のものである。さらにリンクされた地方自治体のホームページを訪ねると、県議会の議事録や家計調査のデータもたちどころに分かるという具合だ。いまやインターネットは強力な行政情報伝播の手段となった。

「電子政府の総合窓口」は毎日更新されているが、全省庁が含まれていない点や、収録範囲、データの更新頻度が省庁によって多少異なるところがあり、ネットワークを駆使した体系的な文書管理を整備するまでに至っていないので注意を要する。また、各省庁のホームページには英語版も付いているが、日本語版の内容がそのまま英語で見られるというところはほとんどなく、更新の頻度や情報量が限られていて、英文による白書なども要約だけというもの中にはある。

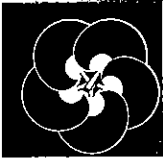
国会会議録 (国立国会図書館)  
<http://kokkai.ndl.go.jp/>

ついに登場した待望の国会議事録の検索システムである。1947年5月開会の1回国会以降の本会議及び委員会等がキーワード等で検索できる。データは会議終了後約2・3週間て入力され毎日1回深夜に更新される。いまのところ法案の全文検索はできないが、質疑な

どの議事内容の部分と、会議録情報(日付、出席者、案件など)の部分は画像データとして読むことができる。なお、末尾資料といわれる法律案、質問主意書、答弁書、決議案などは、テキストデータが収録されないため、全文検索の対象にならないのは残念だ。また、検索語は会議録中の表記と部分一致などのトランケーション機能もついていて便利だが、日本の多くのデータベースがそうであるようにシソーラスのコントロールができていないので、キーワード検索には多少のテクニックを要する。例えば、会議録中の表記が「安全保障」である場合、検索語で「安保」と指定しても検索できず、またこれとは逆に会議録中の表記が「安保」となっている場合は「安全保障」と指定しても検索されないため、適宜OR検索を用いる必要がある。

公文書検索サブシステム  
(国立公文書館)  
<http://www2.archives.go.jp/>

国の行政機関において行政目的を遂行するために作成された公文書等を、後日の証拠あるいは参考資料として保存することは、公正な歴史解明のためには欠かせない。国立公文書館は国の行政機関から移管された文化的、歴史的に重要な公文書等の散逸防止と適切な保管及び公開のためのアーカイブ施設で、歴史学研究的の隆盛に伴い1971年に設立された。保存期間の過ぎた非現用文書や、戦前までそれぞれの機関ごとに保存されていた各省庁の歴史的公文書がここに統合されて、現在マイクロフィルム化も進んでいる。所蔵情報を確認する公文書目録検索サブシステムは、ANDとORの検索条件の他にトランケーション機能も付くなど使いやすい。なお、今年4月から独立行政法人へ移行した国立公文書館の組織再編成により、内閣文庫は閉鎖されたが、明治政府が江戸幕府から引き継いだ中世以来の武家や公家の記録類や旧蔵書などの所蔵資料は引き続き国立公文書館で保存され、「内閣文庫検索サブシステム」でアクセスす



ることができる。昨年1月の省庁再編で官庁文書が整理された際、後に問題になりそうな大量の非現用文書が廃棄されたらしいという噂もあるようだが、行政文書をめぐる情報公開制度と対の関係にあるアーカイブ制度が公正に守られてこそ、歴史の真実も民主主義の実現も在り得る。

米国議会図書館  
日本情報資料センター  
<http://lcweb.loc.gov/r/asian/jdc.html>

日本発の情報には外国からは見えにくい。言葉の障壁もあろうが、日本で流布する「灰色文献」の流通経路のあいまいさは、日本行政機構特有の構造あるいは慣習などが障害となっている場合も少なくない。殊に、内部資料として出版部数が少なく市販ルートにも乗らない灰色文献へのアクセスをめぐる「情報摩擦」が1980年代以降アメリカ議会で度々問題となった。米国議会図書館アジア部門の日本情報資料センターは、日米の情報不均衡是正のため、国際交流基金の資金援助によって1994年に開設された。情報公開に消極的な日本のお役所の厚い壁を「外圧」によって取り除こうとしたもので、まさに情報はパワーである。これまで入手が困難だった審議会答申や調査報告書など政府関連資料のいわゆる「灰色文献」を収集対象の柱としており、その内容も、公共政策から核燃料リサイクル、防衛、自殺率までと幅広い。残念ながら5年間にわたる寛大な日本からの資金援助が切れた後、アメリカ側からの財政援助が得られず、日本情報資料センターは2000年3月に閉鎖されるに至ったが、米国議会図書館のOPACとは別のデータベースに1992年から1999年の間に出版された約5000件が蓄積されており、貴重な情報は現在も同図書館アジア部門のホームページから無料でアクセスできる。

GI OSS-Net  
(政府資料等普及調査会)  
<http://www.gi oss.or.jp/>

政府の各省庁及び機関は日本の

行政に関する最大の情報源であり、またシンクタンクでもある。政府資料等普及調査会が提供するGI OSS-Netは、政府のカレントな行政資料を各府省横断的に網羅する一方、民間シンクタンクの報告書や各種団体の調査報告書なども収録する政策資料のプラットフォームといえる。毎月発行される冊子体の「政府資料アブストラクト」のウェブ版GI OSS-Netは、それぞれの文献情報に的確な要約が付けられており、類似の題名を持つ大量の行政文書を迅速にスキャンするには抄録は極めて有効だ。キーワードや書誌事項による検索の他、複雑な各行政区分の項目別に分類された情報をクリック一つで検索できるなど使い勝手がよい。データは毎週末に更新され、1992年1月以降の資料約40,000件(2001年4月10日現在)を収録している。アクセスするには会員登録の必要があり、初年度には登録料及び年会費の合計16万円の出費を要するのは少々割高の感がしないでもないが、きめ細かなカレントアウェアネスのサービスもあり、またドキュメントデリバリーや、政府関連のレファレンスにも即座に対応してくれるなど、小回りの利く付加価値をどのように解釈するかにも拠るだろう。

JOIS (科学技術振興事業団)  
<http://pr.jst.go.jp/db/jois-db.html>

科学技術振興のための基盤整備と先端的・独創的な研究開発を推進する科学技術振興事業団(JST)は、1993年にアムステルダムで開かれた「第一回灰色文献国際会議」以来の後援団体でもある。JOISは科学技術に関する国内外の文献情報、新聞記事情報、化合物情報、資料所蔵情報などを提供する、有料のドキュメントデリバリーサービスとして1976年に一般公開された。国内外の科学技術文献情報を扱う「JOIS」と、主に海外データベースの利用を目的とした「STN」の2種類のオンラインデータベースシステムがあり、科学技術の全分野の文献情報以外に新聞記事情報も含む。さらに日本情報だけでなく、世界の主要60ヶ国余で出版

される逐次刊行物、米国政府機関発行の技術報告書や、一般に入手困難な会議資料などを収集する。海外情報のほとんどにあらかじめ日本語の抄録が付けられており、大量に発行される科学分野の文献を効率よくスキャンすることができるのはありがたい。原文による文献資料の解説に困難な利用者には翻訳サービス(別途料金)も行う。科学技術立国日本が海外に向かって科学技術振興のための情報発信拠点としても機能しているのも重要だ。JSTは産学連携の推進や地域科学技術の振興等にも力を入れており、NACSIS-IRからのゲートウェイ接続もできる。

NTIS (National Technical Information Service)  
<http://www.ntis.gov/>

科学技術を中心とした情報を日本は欧米諸国からほぼ自由に大量に入手できるが、欧米では日本の情報を入手するのが非常に難しいという、「情報ギャップ」が1980年代の日米摩擦の原因となった。1986年の日本技術文献法に基づき米国商務省に設置された日本技術文献局は、経済成長の著しい「ライバル・ニッポン」のハイテク情報のモニタリング活動の拠点となったところである。この日本技術文献局が収集した日本に関する産業技術を中心とする文献資料は、NTIS (National Technical Information Service)で入手することができる。そもそもNTISは日本技術文献局と同じく米国商務省に属し、米国連邦政府関連の「灰色文献」を情報収集の中心とした有料のドキュメントデリバリーサービスを提供する情報センターである。連邦政府予算で実施された研究開発に関する技術報告書や政府機関発行文献などの保持、公開、またそれらの情報商品の販売活動を行う。政府機関発行文献や米国政府主催・参加の会議録などの他に、ビジネス・国際商業関連の非営利団体が発行する文献、工業規格情報、さらに最近では、国連、世界銀行、国際通貨基金(IMF)、経済協力開発機構(OECD)などの非営利団体が発行する文献もNTISコレ



クシヨンに加わり、入手可能な情報量が大幅に拡大した。

インターネットで誰もが手軽にデスクトップ出版できるようになった今日、「非定形的文献」は急速に増加している。電子ジャーナルやウェブページ、あるいは画像アーカイブといった新たな「出版物」に代表されるように、新しいコミュニケーションの手段は、他方で新しいタイプの「灰色文献」を産み出してもいるわけで、これらは一般に「電子灰色文献」と呼ばれる。伝統的な「冊子体灰色文献」が生産コストの高騰などで減少する一方であるのに対し、流通コストのかからない「電子灰色文献」が急増したため、「灰色文献」全体の拡大・多様化が進み、「灰色文献」をナビゲートするのはさらに難しくなってきた。最近のめざましい電子技術の進展が「灰色文献」情報へのアクセス環境を飛躍的に向上させる一方で、「通常の書籍販売の流通によらず配布」される非定形的文献を産み出し、情報の灰色化に拍車をかける状況をも作り出しているのはなんと皮肉なことである。



## ハーバード・フィルム・アーカイブの日本映画コレクション

ブルース・ジェンキンス  
ハーバード・フィルム・アーカイブ学芸員

ハーバード・フィルム・アーカイブ(HFA)は、過去一年に約300本の映画を上映するなど、映画史の全域をカバー

する上映プログラムで一般に知られてはいるが、実はその名の示すとおり重要な映画フィルムコレクションを保有している。その数は8,000本にも上り、内容も代表的な映画監督による35mm劇場用フィルムから、ドキュメンタリー、実験的フィルム、アニメーションの重要作品にまで及ぶ。フィルムの大半は、サウスボローに在るハーバード大学保管所のひんやりした収蔵庫に眠っている。この重要なフィルムコレクションの手入れと保存を目標に、今秋ウォータータウンの兵器庫建築群跡に開設予定のフィルム保管センターのために、HFAでは昨年一年を準備に費やした。

HFAのコレクションでは、イングマール・ベルイマン、フェデリコ・フェリーニ、ルイ・ブニュエルといった西ヨーロッパ映画界の巨匠達の作品や、ジョンフォード、オーソン・ウェルズなど、アメリカ映画界の巨匠達の作品が充実している。約40本と数の上では少ないが、コレクション中の日本映画の選択基準もこれに準じ、西欧で、巨匠クロサワとして広く知られている黒澤明監督の作品が中心となっている。コレクションには現在黒澤氏の代表作品11本が含まれている。古典期のものでは小津安二郎と溝口健二の作品群もコレクションの重要な一部となっている。同様に、大島渚、今村昌平、篠田正浩、勅使河原宏といった日本映画のニューウェーブの巨匠達の作品も収集している。こういったフィルムは、2000年の冬に企画された「後期黒澤作品」のような回顧シリーズや特別上映企画の中で、順次上映されている。

HFAの日本映画コレクションの中で特筆すべき作品は、40年以上その行方が知らなかった1926年製作の前衛映画の名作「狂った一頁」(英題 *A Page Out of Order*)である。後に「地獄門」で国際的に高い評価を得ることになる、若き日の衣笠貞之助が、無声映画時代に製作し、時に *Page of Madness* とも英訳されるこの作品は、非常に独創的に狂気というものを描写してい

る。衣笠はこの映画の中で時代の最先端を行く同時期のフランス、ドイツ、ソビエト映画に比肩する様々な視覚効果と新奇な舞台装置デザインを駆使している。古典期以降の作品に比べると上映回数の少ない「狂った一頁」であるが、ライシャワー日本研究所との共催で2001年秋に上映した折には、アメリカ生まれの日本映画研究者ドナルド・リッチーが興味深い解説を行い、地元の楽団サバナ・ブランカが生演奏を聞かせた。



ハーバード大学フィルム・アーカイブ所蔵の溝口映画「山椒太夫」より